せとる　くおーたりー
C. E. T. L. Quarterly
教育・学習活動支援センター広報　No.1　発行日 16. Feb. 2001

学長挨拶

小室　金之助

まずはじめに、本学、教育・学習活動支援センターが広報C. E. T. L. Quarterlyを発刊されることを心からお祝い申し上げます。同センターは、教員の教育技能の向上と学生の学習活動の支援を目的として、平成12年5月23日に開設されたもので、そのオープニングセレモニーには、各関係者、学生諸君も多勢出席し、その後、坂本センター長をはじめ、所員の方々の献身的な努力により、順調に運営されていることは、慶賀に堪えないところであり、関係各位に心からの敬意と謝意を表するものであります。

大学冬の時代に突入しようとする現在、あくまでも「学生のための大学」を標榜する本学としては、よりよき教育技術の向上と学生の学習活動の支援を図ってゆくことが何にも増して、要請される課題であります。その意味で今回の広報誌の発刊は、まことに時宜を得たものであり、同センターの今後、益々の発展につながることとなるでしょう。重ねて刊行を喜び、ご挨拶とさせていただきます。

発刊にあたって

センター長　坂　本　辰　朗

世紀転換期は、日本の大学の歴史にとっても、大きな転換点になることが、もはや誰の目にも明らかです。折しも創立者は、その教育提言「『教育のための社会』目指して　21世紀と教育――私の所感」の中で、大学教員一人ひとりが意欲的に授業改革をすすめてゆくことなしには、そして、たえず改善に努力する姿勢がなければ、大学教育の“地盤沈下”は避けられないと指摘されています。

目を外に転ずれば、文部科学省ではすでに、インターネット上での授業について、国内の大学についてはもちろん、ネット上で取得した外国大学の単位をも日本の大学の単位とすることを認めるなど、大学設置基準などの省令を改正する方針を決定したと報道されています。またこの改正では、教える力を教授の資格として重視し、専任講師から助教授を飛び越して教授になる特進の例も示されているといいます。他方で、大学で高校レベルの学習をする「リメディアル教育」の動きが今や全学問分野に拡大し、大学生の基礎学力対策として、大手予備校が進出するまでになっています。

創価大学においても、先生方の授業改善に資するべく、センター発足以来、さまざまなプロジェクトをおこなってまいりました。「掘れば足下に泉あり」という俚諺のとおり、創価大学には教育への熱意にあふれるすばらしい先生方が多数おられます。今回、優れた教育実践を創価大学の共有財産にするために、C. E. T. L.

Quarterlyを公刊いたしました。幸い、発刊の賛同をいただき、多くの先生方にご寄稿いただくことができました。これからも本くおーたりーへご支援のほどをよろしくお願いいたします。

私の授業改善法

「学ぶことの喜びを」

法学部
高　村　忠　成

「大学の生命は講義にある」――じつは、これは私が学生の頃、実感した問題であった。興味ある、知的好奇心をおこしてくれる先生の講義は、今でも私の生命に焼きついて離れない。30年前、創大が開学した頃、たまたま、創立者から言われたことがある。それは、「おもしろい講義をたのみますよ。大学は学生と講義が中心なんだから…。教員は人を引きつける魅力をもたなくてはいけません」と。以来、この言葉は私の生涯の指針となっている。

講義で大事なことは聞く側を飽きさせないということであろう。そのためには、常に新鮮な話題、論理展開、具体的な事例をおりまぜての講義の組みたて方が肝要になる。声の調子も欠かせない私はこれらにはいつも難儀している。今、社会で問題になっているテーマを解説し、そのための良書を２冊紹介するという試みを行っている。

また、講義前にメモで質問を出してもらい、その場で手短かに答えるということもやってみた。私が心がけていることは、講義を通して学生が学ぶことのおもしろさを知ること、学ぶ自分に自信をもてるようになること、そして、将来の目標が見えてくるように示唆してあげることである。ちなみに、学生を馬鹿にするような態度をとることと、「勉強しなさい」と説教することは２大禁句である、と私は思っている。

「作文を使う授業」

工学部
田　口　　哲

大学の教育とは、ひとりで考える力を身につけさせることである。そのための手段方法はたくさんある。その中でも最も有効的な方法の一つとして、作文を使って授業することがある。出来たら英語の作文がよい。作文は、コンピュータのプログラムのように順番が正確に決まっているものはない。ただ、どうして、どのように、何が理解できたのか、そしてそれはどんな意味を持つのかという４つの項目が出来ればよい。この構造さえしっかりしていれば、自分の意思を正確に他人に伝えることができる。

では、このことは授業とどういう関係があるのであろうか。与えられたテーマについて、上記の４つの項目を授業の中の短い時間で実行す

るためには、相当な集中力を必要とする。そのためには授業を真面目に真剣に聞いて、しかも先生の講義の内容を理解していないとできない。理解できないことや聞き逃したことがあれば手を挙げて質問しなくてはならない。もちろん先生の方から質問を促すとともに、逆に先生から学生に質問をする。日本の学生は恥ずかしがり屋である。ただ、インターネットと同じように相手の顔が見えないと普段云えないことも書ける。そこに上記の４つの項目を入れてもらう。後はできた作文を授業中に教材の一つとして使っていく。そうすることにより学生と先生の距離は短くなっていき、学生も心を開く。下手な英語でも英語で作文ができるようになれば「独りで考える力を身につける」という目標は適ったことになる。故に、私はすべての授業で作文を使う。小テストや宿題も毎回やるが、すべて目を通してコメントを書き次回の授業までに学生にもどす。このことは先生が学生を理解する上でも非常に役に立つ。

「授業改善の試みと協同学習」

経済学部
高　橋　一　郎

私は、創価大学に就職して以来ずっと、「ミクロ経済学A」という講義科目を担当している。論理的な思考が要求される科目で、しかも、経済学部の必修科目とあって、一般の学生には、とっつきにくいようだ。クラス・サイズは少ないときで120人なので、どうしても一方通行な授業になりがちである。このクラスでは、改善法とよべるかわからないが、次のようなことを実行している。

①授業開始時に配布する、シラバスに予告したスケジュールに、ほとんど忠実に、授業を進める。

②Web 上で、「需要曲線と消費者余剰」「供給曲線と生産者余剰」など難しいと思われるトピックスを解説する。色が使えるので、図解には便利である。

③中間試験のほかに、テストや宿題を出し、解答も、Web上に、のせておく。学生の参考のために、過去の試験問題ものせておき、　便宜のため印刷してあらかじめ配布する。

④試験直前に練習問題を配り、SAと対話形式で、解説を行ったり、単独で解説してもらったりしながら、学生を飽きさせないようにする。同年代のSAの話は、学生には好評だ。

⑤e-mailでの質問を受け、解答する。

このほかにゼミ（15人前後）では、長い間、レポーターに報告させ、それについて、質疑応答やディスカッションをする方法をとってきたが、どうしても教員とレポーターの間だけのやり取りになりがちで、他のゼミ生は、受身の授業になってしまう傾向があった。そこで、今年から、二人でペアを作り、二人で協力して解答を作り上げ、文書にさせたり、一人が具体例を作り、もう一人がそれを批判するというように、具体的に役割を与えて、ディスカッションさせ、それをモニターするというように「協同学習法」の真似事をはじめた。宿題は、レポート・ボッ

クスで提出させて、学生同士の評価もとり入れる。このような取り組みで、間違いなくゼミはかなり賑やかになった。学生の思考能力も少しは向上しているのではないかと自負している。

先日、教育学習支援センターのワークショップで、中京大学の杉江先生の「協同学習法」を学ぶ機会に恵まれた。今春から、このワークショップで学んだことを、多人数の講義に取り込んで行こうと考えている。

「リアリティこそすべて」

経営学部
渡　辺　隆　之

私の基本的な考え方ですが、授業は「教える」ことではなく、学生が、その領域に「興味を持つ」ことが出来るよう誘導することが重要だと思います。限られた時間の中で、全てを教えること自体、不可能ですし、そもそも、興味がもてなければ「教わろう」という意欲も沸かないはずです。興味を持ってもらう方法は、いくつか考えられますが、キーワードは“リアリティ”です。私は、次のような工夫をしているつもりです。

まず、１つのテーマを講義するたびに、実際のビジネス、あるいは、経済、社会事象の事例を挙げ、その背景や意味を私なりの解釈を加え、説明します。時に脱線をしてしまうこともありますが、むしろ、この脱線も学生が興味を持ってくれる素材となるなら意義があるとさえ思っています。理論や理屈は「おまけ」くらいに考えています。

第２に、極力、学生自身に「体験」をするよう勧めています。例えば、新しい業態のお店がオープンすれば、その紹介をする、また、新商品のいくつかを買い比べてみるよう勧めるなど、頭で考えるだけでなく「体験」することの重要性を授業では強調しています。

そして、第３には、私の一方的な話に終始しないで、「参加」させるよう勤めています。問いを投げかけ、いくつかの選択肢をあげ、正しい答えに挙手してもらうなど、その方法はいくつかあるはずです。あの「おもいッきりテレビ」のようにです！

なお、私は、出席はとりません。学生が是非出席したいと思うような魅力ある授業にすることが教員の義務だと考えるからです。決して、強制しても意味はないでしょう。

編集後記

編集部では、本号に関するご感想、授業法に関する投稿、ご要望をお待ちしております。

今後、広報誌ではFD関連のタイムリーな情報を提供していきたいと考えています。　(N)

C. E. T. L.　Quarterly　No. 1
編集・発行
創価大学　教育・学習活動支援センター
〒192-8577　八王子市丹木町1-236
Tel：0426（91）9782　内線 2148
E-mail：cetl@s. soka. ac. jp